**7月26日　Trunk株式会社　代表取締役社長ＣＥＯ　西元 涼 氏**

**問１　学んだこと、印象に残った言葉、講師へのメッセージ**

大学生に、就職したときに必要なスキルを無料で教えてくれるというのは、大学生である私たちからするとものすごくありがたいと思った。実際に企業に入って自分ができる仕事って何だろう、とたまに考えるが、今までは何もわからず、何もできないと思っていた。このような学生はたくさんいると思うので、Trunkのサービスはとても興味深いと感じた。

テスト期間よく時間がないと感じるように、何かやるべきことがたくさんあると、時間を大切にしようと思えるようになると思うので、常に何かをしようと努力し、時間を有効に使おうと思った。（経営学部・経営システム学科・1年）

Trunkという会社で提供しているサービスは素晴らしいと思いました。日本では新規学卒者の一括採用が行われ、卒業した直後に採用をし、勤務を開始させるため、職能訓練を受ける機会が企業に入る前にはほとんどないと思います。On-JTやOff-JTなど企業に入った後にコストをかけて、時間をかけて一からトレーニングするのは非効率だと思っていました。従って、ドイツのデュアルシステムのようなシステムを日本でも構築しようと起業し、それがまさに日本にこれまでなかった、そして切に必要としていた人材の形成を手助けするビジネスモデルであるのではないかと思いました。(経営　経営1年)

また、明日からテスト期間に入るわけですが、勉強に嫌気がさしてきたころ合いに学問を探求することの重要性についてご指摘されたことをありがたいと思いました。物事の本質をとらえるような、そういった勉強がいつかどこかで必ず役に立つと思うので、テスト勉強、引き続き頑張っていきたいと思います。（経営学部・経営学科・2年）

最後の授業で経営学部の先輩の講義を聞くことができて嬉しかった。学生一人一人がもつポテンシャルを企業側の立場からも見える化したい！という言葉が印象的だった。大学のネームバリューが就職に左右される世の中はどうなのかと違和感を持っていたので非常に共感できた。（経営学部　国際経営学科　１年）

自分はずっと大学に行く意味が分からず、高校を卒業して自分の学びたいことだけを学べばよいと思っていた。しかし、今回大学へ行く意味は視野を広げ思考力を養うことだと初めて気づかされた。確かに、大学へ行かずそのまま就職していたら日本中の人がどんな人なのか知らなかったかもしれない。大学へ来てよかったと思った。（経営　経営システム１年）

企業側の欲しい人材の基準を明確にして、それを満たすスキルを得ることを無料化したのはとても役に立つと思った。就職が厳しくなるにつれ、何をしたら選考に有利、逆にこれは不利という情報が錯綜していて、それに振り回されるのは正直しんどかったので、明文化されるのは嬉しい。（経済学部・国際経済学科・1年）

「やりたいときにやる。やりたくないときにやらない。」「大学に行く意味はあるのか、いや大学は学びの場だ」「転職はいらない」私にはみんなつながっているように思えない言葉たちでした。遊びたい時に遊んで就職したい時に就職する。それなら勉強したくない学生は大学に行かなくていい、ということなのではないかと西元さんに疑問をもちました。でも、お話を聞いて思ったことは、「問題に全力で取り組んで考えること」「学びを続けること」を大切にしていくことが大事だというお話でした。傍からすると、自分の気の向くまま、自由奔放に生活するだらけた人のように思えますが、西元さんが理想にしているのは「自分の思考をしっかり持って世界のために動く人」であり、「既存の枠に沿って何も考えずに行動する人」になるなという思いを伝えたかったのではないかと思いました。 (経済・国際経済1年)

**問２　今後のアクションに繋げていきたいこと**

私は根っからの文系で、これまで理数系の科目はなるべく避けてきた人間ですが、大学に入って色々な友人と交流をもち、プログラミングをやってみたいと思うようになりました。しかし、自分で学ぶにはどうしたらよいのだろうと戸惑っていた部分もあったので、私のように何かしてみたいと思いつつ何もできずにいるたくさんの学生にとってこのサービスはとても有効だと思います。実際に1歩踏み出すきっかけとしてTrunkのサービスを使ってみたいと思いました。(経営学部・国際経営学科・1年)

西元さんが横国の卒業生だということもあり、今まで遠さを感じていたインターンや就活がぐっと近づいたように感じたので、まずは身近な先輩方の話を聞くなどのことから始めたい。(理工学部　建築学科　２年)

**授業スタッフの感想**

西元さんの講演の中で、一番刺さったのは、採用時「コンサルティングをしたいのに、したことがない人ばかりで変」という言葉だった。自分はこの言葉を理解するのにワンテンポ間があった。自分の中にそれが当たり前だという固定概念があったからだ。

親の代にはインターンなど存在しなかったことを考えれば、今の時代昔と違って学生時から社会に出る機会はそこらへんにいっぱい転がっている。言われてみれば、学生だろうと大抵のことはできるように思う。そんな社会の変化に常識の変化が置いて行かれている今現在、今までの常識にとらわれず、今の社会をしっかりと学び、自分で考え判断していかねばならないのだと実感した。インターンの利用に浮いても、やたらめったら利用するのではなく、自分たちは学生であって、学生のうちにしかできないことがあることも考えつつ、社会勉強、自分の現状を知るため、有効に利用する必要があるとも感じた。